

ネガティブ ケイパビリティ

～ あいまいさに耐える力 ～

永田円了

Negative Capability

誰もがかかえる悩みや迷い、でもそこに大きな可能性があるとしたらどうだろうか。効率性が重視され、AIが瞬時に答えを出すこの時代に、その真逆な考え方が今注目されている。「ネガティブケイパビリティ」、すぐに答えを出すポジティブ思考に対し、迷ったり、悩んだりする力こそが大切だ、という考え方である。

「即座に答えを出すというよりも、時間をかけて深く考察することが求められている（作家・村上春樹）。

「結果が出ないとき、どういふ自分でいられるかが一番大事」（野球・イチロー）。各分野のトップランナーたちも、こうした考え方を重視している。

答えの出ない事態に直面したとき、すぐに結論を出さずにモヤモヤし続けることが力だという考え方。この概念が、幅広い分野に広がる背景に、成果主義への疑問があると指摘する人がいる。「不確実の中で浮遊してこそ、確かな真実が見えてくる」と、『ネガティブケイパビリティ』の著者・帯木蓬生氏は述べる。



ジョン・キーツ
19世紀、イギリスの詩人

この考え方が初めて登場したのは、19世紀初頭、イギリスの詩人・ジョン・キーツが、家族に宛てた手紙に記されている。当時のヨーロッパは、ナポレオンが各地に侵攻する戦争の時代、先の見えない中で、結核や赤痢が蔓延していた。そして再び先の見えない苦難の時代に直面した今、あらためてこの「ネガティブケイパビリティ」の思考が重視される。

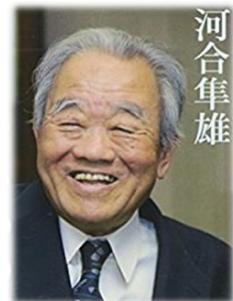
因果律とコンステレーション

人は物事を因果的に考えようとする。こういう原因があってこういう結果があると分かれば、その現象をコントロールできるからである。因果関係さえ見つければ、人間の勝利である。ただこの便利な考え方には危険がはらむ。人は自分のこと、他人のことを考えるとき、因果的に考えすぎるといふ間違いを起こすからである。

何かものごとが起こったとき、私たちは“なぜ”そうなったのか、という理由をさがす。子どもが学校へ行かなくなったとき、なぜ学校へ行かないのか、と子どもを問い詰める。子ども本人は、理由を聞かれても分からない。本当は行きたいのに行けないのだから。

コンステレーションの手法では、この人が学校へ行かないということは、心の中でどのようなことが起きているのか、と心の風景を覗きようとするのである。子どもが学校へ行っていない、との相談を受けたとき、最初にその理由を探さないことである。なぜ、と聞くと話しが限定されてしまうからである。できるだけ開かれた姿勢でその人の心の風景（コンステレーション）を読む。「死にたい」と言われたとき、なぜ死にたいのか、やめときなさい、などとは言わない。死にたいと言う表現の中に、この人はどのようなことをコンステレート（風景として描こうと）しているのか、を覗く。

（河合隼雄、最終講義「コンステレーション」京都大学 1992年より）



河合隼雄



<事例>

クロ現「迷っていいんです」～注目されるモヤモヤする力～

コトバのコミュニケーション3つのスタイル；

ディベート、ディスカッション、ダイアログ

子供を朝起こさない、菅原家の朝の様子、

ETV 特集「断らない」ある市役所の実践 2023/9/16

「たらい回しにされる市民」黒澤明作『生きる』より

一柳義雄「日本の未来」/「スタートアップ大国アメリカ」

河合隼雄の最終講義「コンステレーション」京都大学 1992年

歌・坂本九「見上げてごらん夜の星を」と 松下奈緒ピアノ

円了のホームページ：www.enryo.jp